

序

1986年9月、奈良国立文化財研究所は、かつての平城京の左京三条二坊の西北部分にあたる地域で発掘調査を本格的に着手しました。百貨店の建設予定地でした。

翌年、ここに平城京の街区の4区画分を敷地とする大邸宅の遺構があることが判明しました。平城宮跡の南東に隣接し、南に園池遺構の残る特別史跡「平城京左京三条二坊宮跡庭園」があり、さらにやや離れた南に藤原仲麻呂の田村第推定地があるところでした。それからすると、当然予想できた発見でした。「右大臣や左大臣クラスの邸宅か」と新聞が報じ、住人として橘諸兄をあげたものもありました。しかし、1988年1月に「長屋皇宮」の文字のある木簡が見つかりました。悲劇の宰相長屋王の邸宅があったことが推定できるようになったのです。検出した建物その他の遺構もそれにふさわしい構造と規模を備えたものでした。そして、発掘調査が進捗し、建設工事が一部ではじまったころ、1988年8月、多量の木簡が見つかったのです。「奈良時代の超一級史料」「奈良朝貴族の姿イキイキ」「贅つくした生活」「牛乳使うグルメぶり」「豪邸で犬やツルを飼育」「律令世界へタイムスリップ」、このような見出しが新聞紙上におどりました。1989年9月、予定した発掘調査は終了しました。

発掘終了後5年、発掘データと木簡をはじめとする膨大な量の遺物との整理に見通しがつき、学界はもちろん関心を寄せていただいている多くのかたがたに発掘成果を報告することができるようになりました。3万5千点にのぼる木簡は『平城京木簡－長屋王家木簡

一』として別の報告書として刊行いたします。

この調査と整理には、多くの関係者のご協力とご援助を得ることができました。あらためてお礼を申し上げねばなりません。

平城京域における発掘調査は、平城宮跡における発掘調査を除けば、ほとんどがさまざまな開発事業の事前実施する、いわゆる緊急調査です。それでは、この長屋王邸のように、まとまった広大な面積を一度に発掘できることや調査した場所の住人が特定できることは稀有なことです。しかし、多大の成果をあげながら、この長屋王邸の遺跡は壊滅しました。大規模遺跡である平城京の調査と保存の難しさを痛感させる事例となりました。

奈良時代の生活に関する多量の情報を包含している平城京跡、その調査と保存はどうあるべきか。長屋王邸の発掘調査は大きく問題を投げかけました。調査を担当したわたくしたちは、この発掘調査報告書がこの問題を考えるきっかけにもなることを願っています。

1995年3月

奈良国立文化財研究所長

田 中 琢